

八戸市美術館ボランティア「ハビボ」のみなさんのページです。
今回は、ボランティア発行の会誌の中からほんの一部ですが
ご紹介します。

ハビボ通信

八戸市美術館ボランティアだより ー第6号ー H17/3/25発行

ニューズリポート

●中国陶磁器の真髄に触れる旅（2005/11/26青森県立郷土館）

「景德鎮 千年の歴史展」

本年度後期の研修旅行が行われました。今回は21名が参加。午前8時30分に八戸市美術館を出発、途中「道の駅奥入瀬」での休憩を挟み、八甲田を超え、午前11時頃、青森県立美術館へ到着しました。

開催されていた「景德鎮 千年の歴史展」では、景德鎮陶磁館所蔵の名品の中から120点余りが展示され、色鮮やかに絵付けされた陶磁器の数々に、皆さん熱心に見入って居られました。丁度その日は、景德鎮陶磁館館長の曹淦原氏による、絵付けの実演が行われ、来館者の目を引いていました。

展覧会を見終えた後、一同は青森中三へ移動。催事場で開かれていた「人間国宝 井上萬二と師弟展」も合わせて鑑賞し、それぞれ昼食をとるなどして過ごした後、バスの待つアスパム前へ集合。八戸への帰途に着きました。当日は午後から雨模様となり、肌寒い一日となりましたが、国内外の陶磁器を楽しむ良い機会となったようです。

●2月5日（土）、ハビボ会主催のワークショップ「はがき絵教室」が昨年に引き続き開かれました。

応募者が40名を超える盛況振りで、親子連れや友人と連れ立っての方が目立ちました。ハビボ会代表の安藤清一講師による自身の作品を使つての説明の後、花をモチーフに水彩絵の具を使つて、思い思いに表現を楽しみました。初めての作品とは思えない程の立派な出来映えに感動したり、お互いの作品を鑑賞し合いながら、楽しい時間を過ごしました。参加者の中からは、是非次回も開催して欲しいという要望も聞かれました。

●新しいパソコンをお披露目 ～誰にでもできる初めてのパソコン講座～

2月22日（火）、ハビボ会員を対象にした「誰にでもできる初めてのパソコン講座」が開かれました。

午後1時30分からの研修会の後、美術館の類家さんを講師に迎え、パソコンの歴史からパソコンにできること、基本的な用語の説明などを受けました。そして、今後ハビボ会の会報作りや書類作成に活躍することになる、新しいノートパソコンが披露されました。

現在のハビボ会では、数名パソコンを操作できる会員が在籍してはいるものの、全くの初心者という会員が大多数を占めるのが実情です。事務処理の負担を減らす意味でも、今後パソコン操作のできるハビボ会員が一人でも多く求められそうです。

MEMBER'S VOICE

●「いろのまほうつかい エリック・カール 絵本の世界展」－今年度最大の展覧会－
この展覧会では、グッズ販売のお手伝いとして、たくさんのハビボ会員が参加しました。その参加者から見た展覧会場や絵本に対する印象とは...？

◆エリック・カールは有名な絵本作家という事ですが、私はこの展覧会まで知りませんでした。忘れていただけかもしれませんが、子供の頃にこの人の絵本を読んだ記憶がないのです。売り場に立っていると、子供よりも大人の方が楽しんで、はり切っていたように見えました。自分（大人）がいいと思うもの、感動したものを、大人が子供に、また子供が大人に紹介している姿は、見ていて嬉しくなりました。一人で見に来る方、お友達と来る方など、年齢に関係なく楽しんでいる顔はとてもよい感じでした。

「想像」を楽しむ時間がこの展覧会にはあったと思います。確かに絵は描かれ、文章もついていて、一応絵本は完結しているけれど、その続きの話を考えたり、登場人物になってみたり、いろいろと想像を膨らませることができたのではないのでしょうか。エリック・カールの絵（色彩）も、好みではない方もいるかもしれませんが、それはそれでまたいいと思います。

大人も子供も、一人でも大勢でも楽しめる、このような展覧会がまた開催されるといいなと思います。ちなみに、私の好きな絵本は、「うたがみえるきこえるよ」（エリック・カール作）、「スイミー」、（レオ・レオニー作）「100万回死んだ猫」（佐野洋子作）です。（行事・広報担当 笹本紗代）

◆洒落た色彩で、小さな言葉をふくらませて見せるエリック・カール。

美術館の小さなコーナーは、その世界が溢れる魅力の扉があっちにもこっちにも...。小さな瞳が、愛らしい表情が、真剣に自分の扉を探します。「私、未だにこの世界から足を洗えないの。だからまだ悟れないのね...」そう言いながら、首をすくめて笑う、白髪の女性。その方が美しく見えました。－どういたしまして、私も同じ－。心の中でそう答えながら私も首をすくめてみたりして...。私も孫のプレゼントに三冊程。そして私のためにも一冊。これらの絵本を開く子供達が、どんな大人になるのか（孫も含めて）楽しい想像に思いを馳せながら、私の絵本『パパ、お月様とって』の女の子の年齢に戻ってみたいくなりました。（私もあの梯子を昇りたくて）

この展覧会に足を運ばれた方は、今までと少し違う自分に会えたのではないのでしょうか？ そう思いたい私でした。

（創作指導担当 佐藤レイ）

●「景德鎮千年の歴史展」－華麗な陶磁器の魅力を満喫－

青森県立郷土館での研修旅行では、青森市に向かう途中の紅葉と共に、景德鎮の陶磁器を鑑賞しました。絵画とはまた違った魅力を発見できたようです。

◆今回の展覧会で、特に印象に残っているのは、清時代の作品「粉彩九桃文天球瓶」です。図録の解説によると「瓶の胴部の絵は、一本の力強い蟠桃が描かれ、九つの桃が実っていて、桃花も満

開、枝葉は繁茂して、真に迫っている。色彩は淡い釉薬で秀麗である。」と述べられています。この瓶の形はもとより、その絵の素晴らしさにも感動させられました。

また、この瓶に描かれている蟠桃というのは、「学研漢和大字典」によると「仙人が住む山の中にある桃の木。三千年に一度実るという。」と説明されています。まさに、悠久の中国の歴史を実感致しました。今回の研修旅行は、青森市に向かう途中、バスの車窓から見た紅葉も満喫でき、まさに芸術の秋にふさわしい研修旅行でした。

(資料整理リーダー 若林松蔵)

Member's column

～多彩なイベント～

今年度10月、八戸市美術館が「いろのまほうつかい エリック・カール絵本の世界」を開催した。美術館の松本さんによると、7000人を超える入場者を会期中に集めたそうである。

エリック・カールのコラージュは「ティッシュペーパーアート」と呼ばれ、着色したトレース紙をはり合わせて作る、独創的な色使いが魅力であった。中でも、私は色の重なり注目したものである。期間中、佐々木惣一(行事・広報リーダー)さんの主導で延べ84名のハビボ会員は交代でグッズ販売の手伝いや、木村伯子さんが開いた折り紙の体験ができるKIDSコーナーでは、観客を巻き込んで毎回到ぎわった。また、会員の吉田智恵さんの司会でエリック・カールの絵本の読み聞かせが催されるなどたくさんの参観者から注目を集めたのは周知の通りである。

好評だったのは「装の技—美の術で、あなたもファッションナブルに」もである。金田幸蔵さん(元日本デザイナークラブ正会員)を講師として招き、50名を超える参観者で大盛況であった。会員の中からもモデルとして登場したハビボ会員の白石昭宣事務局長さんや平さよさんにも温かい拍手が寄せられ、心に残る楽しいイベントであった。

今年度の講座では、市民の要望に応える形の「水彩画入門講座」と「油絵入門講座」を開講し、定員を大幅に上回る申し込みがあり、活動が続けられている。ハビボ会員の皆さんが毎回お手伝いに来て活躍している。また、ハビボ会で企画・運営しているものに研修旅行がある。6月22日、岩手県立美術館での「ゴッホ、ミレーとバルビゾンの画家たち」展と11月26日、青森県立郷土館での「景德鎮千年の歴史」展は私たち鑑賞者の期待に添う企画であった。

山道真紀子(行事・広報副リーダー)さんが主導する「ハビボ通信」も第6号を発行するまでになった。「ハビボ通信」は美術館や「まちの駅はちのへ」にも置かれ、広く美術館やハビボ会の宣伝に役立っている。ハビボ会の多くの企画・開催が各方面から注目を浴びてきたのは嬉しい限りである。

ここに来てハビボ会は、「こころ」を豊かにする文化ボランティア活動を目指す方向性が見えてきたようである。このハビボ会の活動には、高校生や大学生など、若い人をもっと引き込んで活動をし、世代間の交流が進むと素晴らしいだろう。

(ハビボ会代表 安藤清一)